
神様の好奇心は人をも殺す

all

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の好奇心は人をも殺す

【Nコード】

N8263Y

【作者名】

all

【あらすじ】

神様の好奇心によって殺されたも同然の高校2年生の神坂望。責任を感じた神は望を異世界に転生させた。

そう——望が四六時中していた「妄想」を現実に行ける世界に。

プロローグ ・ 異世界への転生 ・ (前書き)

始めまして、小説始めました。

このような執筆作業は初めてなので誤字や日本語としておかしい部分が多々あるかもしれませんが生暖かい目で流すように読んでいただければ幸いです。

プロローグ ・ 異世界への転生 ・

彼、かみさかのぞみ神坂望はいつものように歩道を歩き交差点で止まり、信号が青になったらまた歩き出し、学校へ向かう。

朝の7時半。朝日を体に浴びながらいつものように同じ道を歩きたいつものように学校につく——はずだった。

事は学校の裏にある信号のない小さな交差点で起こった。

「それ」はまるで十字路を渡る望が見えていないかのようなスピードでこちらに突っ込んできた。

横によけては間に合わないと「判断」した望は四六時中やってたいた妄想どおりに体を動かす。

ボンネットに手を付き、体を浮かせ、背中に背負っていたカバンをフロントガラスに打ち付けるようにしてダメージを殺す。

（妄想成功！）

ガッという音が響き、ボンネットの上に体を預け——「それ」がスピードを落とした。

「それ」いきなりブレーキが効いたかのようにスピードが落ちた。慣性の法則により打ち出され大通路にでてしまう。

次の瞬間、トラクションの音が鳴り響きその中に鈍い音が混じっていた…。

これが神坂望が異世界に転生することとなった世界で最後の出来事である。

この世界の神様はあまり人間に手を出すことはなかった。

というよりもと興味があんまりなかった。

しかし世界に常識があつて非常識があるのなら、神世界しんせかいでも非常識と呼ばれる神はいるものである。

そしてその神の世界での非常識と呼ばれる神は望の妄想を知り、面白がり、試したのだ。

人間とはどこまで「準備してある物事」に対処できるのかと。

つまり、望がいつも通学路でやっている「どうやってからいよくかわすか交通事故の対処法」という現実味のある妄想を現実に引き起こしたのだ。

運転手から望の姿が見えなかったのは神のいたずらであり、それが結果一人の人間が逝った。

神は責任を感じた。神のいたずらは一人の人間の、いやその周りの人間も含めて全員の未来を狂わせたのだ。

家族友人はもちろんのこと、クラスメイトや担任の先生等は十分に周りの人間に該当するだろう。

望は転生者に、そして神は祈った。

そしてその神は世界に手出しすることを自ら禁じそれ以降世界をのぞこうともしなかった。

その神が上位神によって「天罰」を受けたのはどうでもよく、知らなくてもいい現実。神世界

重要なのはこれにより望という転生者が生まれ、異世界で生きていくことになったということ。

そして、望は異世界で二度目の人生を生きるということである。

神がその異世界での生活を見守っていたのも彼にとっては知らない、知らなくていい現実。

ブログ ・ 異世界への転生 ・ (後書き)

転生物を多く読み流されるように書き始めてしまいました。
投稿は不定期です。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（前書き）

異世界は基本、絶対基準が私の妄想であるためこの筆者が生きている世界と発展の仕方が違うのはご了承ください。

つまり、世界と異世界では思考の仕方が違うため基本となる常識が異なっています。

極端な例にするなら「人間と精霊では考え方が違う」みたいなものと同じです。

攻撃方法、つまり世界で「妄想」した魔法での戦い方と異世界の魔法での戦い方は違う。

さらに言えば食生活で食べ物を腐らせる（醗酵）ということを考え付かなくてもなんら不思議ではないということです。

結論として、この小説の異世界の人間はこちらの常識では計れないということ。

さらに言うなら登場人物は人間ではない、もしくは人間に似た動物と考えていただいても結構です。

なのでこのことを踏まえてこのページでの画面スクロールをお願いします。

それでは転生というアドバンテージを持った精神年齢高校生から始まる「妄想が日常」の神坂望の日常をお楽しみください。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳

転生者

転生の言葉の意味としては、前世の知識を持ったままもう一度人に生まれること。これには動物を含めて転生する説もある。

ここでは、転生者とすることで人が人に生まれることを指すことにする。

そして、転生者はそれだけでアドバンテージになることが多い。

転生先が異世界であったり、現在の世代より古ければ古いほど技術や人の精神や考え方が発展していないためである。

未来に生まれたってその未来の人たちと常識が違うのだから新しい発見が可能かもしれない。

もう一つ、転生者にとって決定的なアドバンテージがある。

なにせ生命が生まれた瞬間から自我の確立ができているのだから…。

三歳になった。

昨日誕生日だった。

特に何をするわけでもなくただ生きている。

要するに退屈なのだ。

いや少し違うか、興味をそそるものがないのだ。

いやこれも少し違う。

興味あるものに触らせてもらえないのだ。……うんしくりきた。

毎日自分の部屋から外を見るだけ。

自分の家族が住んでいるところはたぶん高級住宅地。

家に面している通路は歩いている人たちは少なく逆に馬車とかが多かった。

大通りが少し見える。人とか露天とか、沢山いて沢山あった。

人ごみは前世では嫌いだったけど今じゃ地下鉄の混み具合が懐かしい。

うん、暇だ。

成熟したとはいえない、高校三年生未熟な精神だがこれは常人だと発狂レベルですよ。

目の前に！体の中に！「魔法」や「魔力」と呼ばれる未知なる力が眠っているというのになーんで我慢せななんのか！

自分は生まれる前から意識はあった。今でも記憶はある。体の中に気味の悪い力が眠ってたのにも気づいた。

このことから自分に何らかの力があり、異世界に転生したのでは？と仮説を立てた。——結果その通りだったわけだが…。

まあ、その力のおかげか生まれるまではまるで油の浮いた砂糖たっぷりサイダーのプールに入っているかのような気持ち悪さだった。

その上、体は思うように動かないただじっとしてただけ。

いつ出産されるかもわからない、そんな状態ですつと我慢していた私。

あれは地獄だ…。いや地獄だった…。か。

毎回地獄を思い出してどうにかこの退屈と比較して「まだましだ」と思いながらも、さすがに限界だ。

その出来事きっかけが誕生日パーティーだ。

誕生日パーティーを両親が親戚や貴族を呼び祝ってくれたのだが、これがこれがまたまた面倒だった。

なんで三歳児が貴族の面々に挨拶回りせにやなんのだ！ともう内心何度叫んだことか…。

自分の子供を何かしらの分野で認めてくれているならさっさと魔法教えてくれよ…。

周りに同年代の子供はいないし完全大人だけの世界。

どうやら貴族たちへのサプライズみたいなものだったらしい。

いや、ここはどう考えたって子供の成長を促すために同年代の子供に会わせるべきだろう…。

言葉とかさ、まだぜんぜん完璧に覚えているわけでもないし発音も舌足らずだし、会話こなさなきゃ覚えらんないよ…。

どうか違うというか抜けていてずれているそんな自分の父親ダニエル・シルフィールドと母親サラ・シルフィールド。

両方結構めんどくさい性格をしている。それでいて結構な貴族である。

が、なんとというか人を驚かせる事に人生かけているような人だ。^{善人}_{悪人}

相手は本当に誰でもいい。騎士団長を相手にしたこともあるのだ。

時たまにある人物からサプライズの依頼が来ることもあるらしい。本業おろそかにしてない？これも本業のうち？

自分が巻き込まれなければドッキリカメラ映像を見ているようなも

のだった。

しかし、巻き込まれるとタチが悪いじゃすまない。

というか三歳児をサプライズの相手にするというその精神が知りた
いよ。

さらに、元いた世界世界に魔法があつて、こちらの世界異世界では魔法がある。

この違いだけでドツキリの部分がどれだけ前の世界と違うかわかっ
てくれると思う。

ああ、自分も早く魔法を使いたい…。

三歳になったんだから許してくれないだろうか？

あ、女から男になりました。

あーもう月ものとか考えなくていいから楽！
もう下のことなんて特に気にしなくなりましたとも！
ええ！気にしなくなりましたとも！

もう無意識でいいよ。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（後書き）

名前が思いつかない。

名前だけに15分かかってしまいました…難しい。

精神は肉体の影響を受けると某吸血鬼Kさんが言っていたのを思い出しました。

言動は肉体に影響されていきます。でもやっぱり根っこの部分は女性で。

いけたらいいなあ。

台詞の掛け合いとかもぶつつけ本番。
読めるようなもの書けたらいいなあ。

魔法、魔力の勉強法？（前書き）

サブタイトルも難しい。

魔法、魔力の勉強法？

基本と応用

物事の「基本」というのは土台部分であり、その土台を固めていく必要がある。

建築物で例にするなら地中に埋めた基礎部分だろう。

応用は基本の上に積み上げる「モノ」であり、建築物の見た目部分にあたる。

なら建造物の間取り等の中身は？

経験である。

「親父！おれにまほうをおしえてくれ！」

「・・・あー、魔力の使い方なら教えてやろう」

「それってなにかちがいはあるの？」

「さすがにまだわからんよな」

わかってますけどね。

うん三歳なんだからこれぐらいがたぶんベスト。

違いが分かったらさすがにおかしいだろうし。

自分は両親が自分を転生者ということを知らないままでいてほしい。

特に理由はないし本当の息子として生まれてくる魂を押しつけた自分^{生者}に罪悪感を感じたことはないといったら嘘になるけど面倒事なんて極力避けたい。

破天荒な両親のことだからたぶんないとは思っけど放りだされる可能性が無い訳ではないし。

ん？日本語が微妙におかしい・・・か？

日本語の話し相手がいないからいつも自問自答しかしていない。

独り言が最近寂しくなってきた。

ま、閑話休題

それはそれとして

魔法に興味を持ち出すのは三歳からが多いらしい。

好奇心が高い時期だからだろうか。

いやーどうでもいいや！とりあえずテンション上がってキター！

「ん、よし。それじゃ始めよう。といってもどうしたもんか。」

「え？」

「…まあいいか。とりあえず俺の魔力を流し込んでみるからそれを外にはじき出してみろ」

「そとにだせばいいの？わかった。」

そういうと親父は手をつかんできて——いきなり寒気がしてきた。自分が別の何か、自分じゃないものに侵されていくようなそんな感覚。

自分が自分じゃなくなる——いやだ！

その時、バチン！と空気が震えて親父が数歩よろけた。

親父が青い顔でこっち向いてる。

あーやばいかも？なんかやつちゃった？

「…よ、よし。基本ができてるなすごいぞ。」

いや、今の基本が出来てたって顔じゃなかったよ？

今は仮面ボーカフェイスかぶってるのか平常に見えるけどあの顔は…おかしいよ。

「うん。ちょっと父さんは仕事があるからなまた後でな」

呼び止めるまもなく部屋を出て行った。

うん、逃げられた。

いや、逃げてくれてよかったかも。考えをちょっと纏めよう。

魔力の操作方法の基本は出来ている。終了。…じゃなくて

あの驚きっぷりから見ると基本以上のことが出来ているってこと。

魔力量が多かったのか魔力の使い方が上手だったとかそんなところ
操作
だろうか。

前者はどうやって調べればいいのかわからん。自分しか基準がない
からなあ。

後者は後者でまたわからん。どれだけ滑らかに動かせるとかそんな
感じなのかな？

毎日やること本当になくて魔力に慣れることばっかりやってたから
油の浮いたソーダ
それが原因かな？

あとは子供ながらの成長力。高校二年生大人の精神と子供の本能力なんじゃそりゃで成長が著
しいとかか？

まあなんにしても、魔法に対して転生者としてのアドバンテージが
出たところか。

転生者はやっぱりチートに入る域にあると思うんだ。うん。

三年間魔法の制御だけしかやってないんだから当然っちゃ当然なの
かも。

ほかにもこの世界、技術発展してないしお金に困るとは無いと思うけど、技術見せ付けて必要以上に目立つなんてこと、したくないなあ。

絶対妄想力豊かなどこそ馬鹿共に改良されてしまおうと思う。

んで戦争と。自分の発想が戦争に使われるなんてそんな後味悪いことしたくないなあ。

自衛のために使っちゃいますけどね。

んじゃ親父どのの反応を待つとしますか。

…いまさら不安になってきちゃった。

気づ^{転生}くわけないと思うんだけどやっぱり少し不安になるなあ。

魔法、魔力の勉強法？（後書き）

主人公の特別は基本、あの世界での妄想とこの異世界に転生したことです。

もちろん知識もありますが。

基本の上には応用もありますけどね？

投稿時間は何時にしたらいいんでしょうか。

とりあえずまた19時におきました。

投稿は一週間に一回出来れば良いほうだと思います。
それでは次話で

父親の反応は家庭教師と専属メイド（前書き）

人によつては超大作のある生き物を思い出すかもしれません。
そのあたりはご了承ください。

父親の反応は家庭教師と専属メイド

能ある鷹は爪を隠す

狩をする鷹が爪を出していたら獲物に見透かされることの意味。

これを実行するには世界の常識と自分の常識を重ね合わせていつでも自制をしなければいけない。

ではまだまだ未熟な精神である私はいつまで自重することが出来るのだろうか。
転生者

父が逃げた次の日

「はじめましてエリック様。私は魔法の家庭教師と呼ばれましたユアンです。どうぞよろしく」

「はじめましてエリック様。私はエリック様の専属メイドとなりましたアンナ・フリーエルです。これからよろしく願います」

父よ、私はあなたの反応を予測し切れなかったようです。予想外です。

家庭教師はうれしいんだけど…座学を三歳児からやらせるつもりか。

私は能力的問題ないと思うけど…自分の時三歳児って勉強したっけ？
高校二年

………天才児として祭り上げられるのはごめんだしもっと自重したほうが良いね。

あと専属メイドか。

こっちはちょうど良いかも。

でも冷静に考えたら何で今？魔法を勉強するから？

…あゝ道徳みたいなものか。

つまり私の父親は道を踏み外さないように心の鍛錬もしようって画策したわけだ。

そういう心遣いはありがたい。

でもメイドなんてこの家で見たことなかったんだけど…。

専属メイドアンナさんの場合

「では、エリック様何なりとお申し付けください」

まさにメイド！っていうのが第一印象だったアンナさん。

艶やかな茶色の髪、キリッとした規則に厳しそうな目、出るところ出てはいないけどスレンダーと言っていていい体。

その直立姿勢で待機している姿はメイドさんそのもの。

似た目年齢二十代後半ぐらいかな？とか考えたらなんか寒気がした。
……あまり考えないようにしよう。

「えと、さっそくしつもんなんだけどメイドさんをこの家でいちども見たことないんだけど」

「それは当たり前でございます。メイドは主人の前に姿を見せずに仕事をする。その事を主人への礼儀としていますから」

え？

「それじゃあこの家にはいまだれぐらいのメイドさんがいるの？」

「ダニエル様の専属を含めますと4人でしょうか。料理人を含めればもう少し増えますが」

つまり、もともとフリーは三人いて自分はその三人にまったく気づかなかつたわけだ。

…なんか怖！

メイドさん侮りがたし。アキバの路上メイドとかとはやっぱりちがうね。

貴族なのに従者がいないのはおかしいとは思ってたけど、そんな理由だったんだ。

にしても自分専用か？なんかもつたいないね。自分の前世からの価値観はいったん崩壊させたほうが良いかも。

でもこれでメドが立った。両親とも忙しいしこれを頼むのは躊躇してたけど。

おっと、子供らしく子供らしくと。

「せんぞくつて自分だけつていみだよね？」

「はい。私はエリック・シルフィールド様の専属メイドです」

「それじゃあ、親に内緒にしてほしいことがあつてそれを言わないでいったら？」

「エリック様に危険がなければもちろんそれに従います。」

「ぜつたいに？」

「絶対でございます。運命と月の神ルナ様に誓つて。」

「それじゃあやりたいことがあるんだ…。」

家庭教師ユアンの場合

「では改めまして、このたびエリック様の家庭教師として呼ばれましたユアンです。よろしく願います」

「よろしくおねがいします」

こっちはー40代後半のオジサン…はちょっと失礼かもしれない。
でもそれぐらいしか浮かばない。

髪は金色でちよつと派手。顔は特徴がないね。

服装も魔法に関わっている人には見えないし…特徴のない40代か。
うん、一般人の40代のオッサンにしか見えない！あれ？さっきより印象悪くなつてないか？まあいいや。

「まほうのべんきょうつて何をするんですか？」

「はい。ダニエル様から多少駆け足でもよいので魔法の基礎を教えるように言われましたので…」

目の前にちよつと分厚い本が2冊ほど置かれた。
つてことはやっぱり座学ですか。

私って三歳児だよね？

あれ？もしかして文字読めるって思われてる？

「あの、まだ文字おぼえてないんですけど…」

「……………」

まあそうなりますよね！？

「…それではまず文字から覚えましょうか。最低限、日常生活に支障がない程度になつたら魔法を勉強するということだ」

「すみません親父が無茶を…よろしく願いします」

文字は居心地の悪さと魔法への好奇心から二十日程度で覚えることが出来た。けど…

先生が顔を青くしてました。またやっちゃったよ…。

これからは七日に一回のローテーションで魔法の勉強をするとか。

道德の勉強のペースに合わせた結果らしい。

前も悪もまだ判断つかない子供のうちに大きな力を持たせるのは危険だと判断したからだと聞かせてくれた。

普通、^{三歳}私に聞かせても意味が無いと思うんだけど。

後、先生は家庭教師を専門でやっているわけじゃないらしい。

だけど魔法そのものに携わる事を仕事にしているのだとか。

そのまた会えるときを少しは楽しみにしていよう。

父親の反応は家庭教師と専属メイド（後書き）

台詞の時にエリックが父親を呼ぶときに「親父」になるのは男言葉
を少し間違っただけで覚えているから。

とか無駄設定考えるのは結構好きだったり。

母親は父親より忙しいという設定です。

初めてのお気に入りがありました。思わず小さくガッツポーズ。

報告活動で書いたミス修正

これからは七日に一回のローテーションで魔法の勉強をするとか。

本職が始まったらしい。

なんの職業かは教えてくれなかった。

魔法を勉強し続けてればまたあえるらしい。

そのまた会えるときを少しは楽しみにしていよう。

←

←

これからは七日に一回のローテーションで魔法の勉強をするとか。

道徳の勉強のペースに合わせた結果らしい。

前も悪もまだ判断つかない子供のうちに大きな力を持たせるのは危険だと判断したからだと聞かせてくれた。

普通、私に聞かせても意味が無いと思うんだけど。^{三歳}

後、先生は家庭教師を専門でやっているわけじゃないらしい。

だけど魔法そのものに携わる事を仕事にしているのだからか。

そのまた会えるときを少しは楽しみにしていよう。

専属メイドと家庭教師を得た五年後（前書き）

食べ物に関してです。

悩んだ末主人公は見た目ではなく味で食べ物の呼称を判断しています。

心の中では似たような味をした食べ物を前世の呼称でよんでいます。なので台詞の中にこの世界にはない固有名詞が出てくると思います。その場合基本、後書きにて説明させていただきます。

望^{日本人}が一応満足するぐらいには食生活は発達しています。

専属メイドと家庭教師を得た五年後

重力

万有引力とも言い、物体の重さを作り出す原因。

人間の体はこの重力という刺激によって体が作られていく——いや、重力に耐えられるだけの体を人間は作っていく。

しかし、骨や筋肉は重力という刺激があるからこそ育っていく。

では無重力状態ではどうなるのか。

宇宙飛行士は無重力である宇宙に出ると必ず運動を欠かさないという。

その理由は、常に重力による刺激がないため常に骨や筋肉が劣化してしまうから。

正確には人体の自己再生能力が低下してしまうのだ。

人体には体の組織を壊す細胞と再生する細胞がある。

この再生する細胞の能力が低下して破壊と再生のバランスが崩れ人体が常に劣化してしまう。

では逆に重力が強ければどうなるか。

骨や筋肉への刺激が強まり、日ごろの何気ない運動でもそれなりの筋肉の発達が促されるだろう。

追加

しかし、あるステータスは高確率で男性平均以下になるだろう。

「万物にその身を与える重力の意思よ、その御身の息吹 わが身に纏わせ我が意に従え。」

自分の体が少し軽くなった。

「……え〜」

エリック・シルフィールド八歳。
今日が誕生日。

まるで神様がプレゼントを与えたように今日一発目、重力魔法が発動できた。

「なんか達成感がない……けどまあいいや出来たんだし」

後は、重力系の魔方陣と刻印を勉強して完璧だ。

「上位三原則魔法 重力系」と背表紙に書かれた本を閉じ、本棚にちゃんと戻す。

「五年か、結構時間がかかったかな？」
八歳

これで特別な人だけ使えるという無属性魔法以外は使えた。
チート

そう、この世界に勉強するものとしてある魔術は——ん？
少し違うか、この世界で一般人に「知られている」魔術は使えた、
だ。

後は、自分の魔術を創っていくしかない。
オリジナル

すでに構想はあるし。（転生前の世界はアース地球と呼ぶことにした。）
アースでの妄想

ふふふ、私の妄想は尽きることはない。例えば神が敵として攻撃して
きたとしても、
Unlimited
私の世界に傷一つつけられる事と思うな！

ふう、落ち着け。

でもこれって遊びが勉強になってるような。

よく工学系の兄さんが「勉強は遊びみたいなもの」とか言ってたけど
ど今ならその気持ち分かるかもしれない。

……あーちよつと思ひ出したら目から涙が出てきちゃった。

思ひ出し泣きつてあるよね？

別れ、と言えば家庭教師として来ていたユアンさんともだ。

契約としては基本魔術「四原則魔法」ができるまで、だったし。

これ以上顔を青くされたくないのでもユアンさんには時間の面で、ダニエル父さんにはお金の面で申し訳ないけど五歳ぐらいまで付き合ってもらった。（それでも十分に驚いていたが）

さらに魔法の勉強をし続けていったらまた会えるのだからあんまり寂しさはない。

中学校の担任と卒業式で別れるような感じだろうか。会いに行けば会えると。

五歳といえば、外出できるようになりました。（ダニエル父さん付き）

外にでて市場に行ったときなんか「異世界に来た」ってことを強烈に実感させられた。

頭でわかってても体は拒否ってたのかな？

そこで出会ったこの世界での初めての友達、アレン・アルタイル。男性五歳。

知り合った理由はアレン君の父親、ガウディー・アルタイルさんはダニエル父さんと旧知の仲だった。

親が親なら、子も子でというのが、友達になるのにそう時間はかからなかった。

基本聞き手に回ることが多い私だから勝手に喋ってくれるのはありがたい。

馬鹿だが……。

分からないものはとりあえずたつ切ればいいという豪快な考え方である。

考えていないともいえるな。うん。

それはそれとして
まあ閑話休題。

「これでまた妄想を現実化させることが出来るかな？」

重力系に関して、実現させてみたい妄想は今のところ二つぐらいある。
——
けど、

「火属性はあるのに爆発がないんだもんなあ」

そう、火を魔術で作り出す事は出来た。

けど、魔法そのもので爆発を引き起こそうとは考えなかったらしい。

これがないと二つのうち一つはまだ実現不可。

やっぱり、オリジナル自分で創るしかないか。

……っと、

「エリック様、訓練の時間でございます」

背後から声をかけられるなんてもう慣れたものですよ。

五年前、両親に内緒でアンナさんに頼んだこと。

漫画でも良く出てくる脳の訓練を手伝ってもらっている。

「はい、わかりました」

そうして今日も、魔術の勉強部屋の地下室から出て朝日を浴びる。

今日の朝食はなんだろうかと考えながら。

内緒にしている意味はないけどね？

専属メイドと家庭教師を得た五年後（後書き）

はい、魔術に結構関わってきました。

すでに魔術の構想は練り終わっております。

一気に説明するのもあれなので少しずつ出していこうかと。

詠唱考えるときは顔真っ赤。

総合評価が二桁を超えました。

ありがとうございます。

こういう気持ちは忘れたくないですね。

朝食までの道のりも訓練（前書き）

脳みそに関して少し触れています。

独学なので曲解があるやもしれませんがご了承ください。

朝食までの道のりも訓練

右脳

脳みその右側であり、直感、創造性、つまりはイメージや音楽に
いての働きを主としており、

つまりは感覚を司っている。

この右脳は幼少の頃までは左脳の論理的思考よりも優勢である。

が学校教育で言葉や計算、論理的思考を習うに連れ次第に左脳が優
勢になっていく。

もちろん左脳は大事だが、右脳だって必要だ。

なら幼少の頃から自我の確立ができているために論理的思考をして
いる望は、右脳を鍛えるとどうなってしまうのだろうか？
転生者

私は今、自分の家の廊下で目隠しをされてメイドさんアンナの後ろを歩い
ている。

もちろん足音なんて一人分。

一応、目隠ししているこうしている訳は一つしかないけど重要であつたりもする。

というか私が頼んだことの一つである。^{訓練}

空間認識能力または空間把握能力なんて聞いたことは無いだろうか？

物質、物体が現実^{三次元空間}にある状態。

その物体の位置や情報をすばやく正確に知覚することである。

ぶっちゃけて言えば遠近感が良くなるってことでもいいと思う。

この能力は二次元的、つまり地図などの紙に書いてある物体を三次元的に頭の中で展開するのに必要な能力である。

他にも、飛ん^{危険な物体}でくるボールをつかんだり避けたりする行動、コレも空間認識能力にあたる。

もちろん、あたらなければ避けなくても良い。

狙った所に何かを当てる行動も空間認識能力が必要になる。^{ヒッキングや射的}

私の感覚で説明すれば、現実^{リアル}に対する認識力を上げる訓練である。

そのトレーニング方法は目を閉じることだ。

普段何気ない行動を、目を閉じて行くと、空間認識能力は活発に活動し、トレーニングになる。^{訓練}

この能力は右脳によってコントロールされており、人間の構造上、女性より男性のほうが能力が高いとされている。

男性に生まれた一つの利点かもね。

コレもまた私がこの世界で実現させたいこと妄想の一つの下準備。

完全に趣味だけど自衛武器になるしね。

五歳になるまで絶対に家から出さない。

コレだけでアースの日本みたいに治安が良いわけではないと断言できそうだ。

全部の家がそういうわけじゃないと思うけど貴族の息子という立場なら仕方ないのかもしれない。

「着きました」

「正解でございます。では朝食です」

目隠しをとりて扉を開ける。

……珍しくダニエル父さんとその後ろに控えている専属執事のヘラルドさんがいた。

ちよつとばかり大切なお話があるみたいだ。

「おはようエリック」

「おはようございます。父さん」

コックが料理を運んでくる。

朝からパスタですか。しかもすこし油っこそう。

見た目はペペロンチーノかな？

「食事が終わったら少し大切な話がある」

「わかりました」

この世界では食物に感謝をするという概念がないのか、食事前の挨拶みたいなものがない。

フォークとナイフを逆の手で持ち、心のなかで頂きますと唱えて食べ始めた。

やっぱり油っぽい。

- - - - -

食事が一息ついて、

「エリック。誕生日おめでとう」

私は自分で朝、今日は誕生日だと思っていたのにすっかり忘れていた。

でも、これが大切な話かな？

「ありがとうございます」

「昨日、母さんと話し合ってたな？エリック、お前をヘルムート学園初等部に編入させることにした。出発してもらうのは明日だ」

「.....サラ母さん？」

なんとか一応、言葉を搾り出した。

ふう。

.....そうですかサプライズですか全く。

学校はいい。いや、良くはない。なんで出発が明日？

なんで今日までずっと黙っていたのか。

そんなものはわかりきってる。理由両親だからだ。

……いや、ちょっと待って！準備とか何！？どうするの！

うわ、むっちゃニヤニヤしてるよ！

ヘラルドさんも表面上何もリアクションをしていないが、内心笑っていることに違いない。

アンナさんは————じゃなくて！

「ああ、サラなら心配ない。、また少し忙しくなってきたみたいだな？会えないのが残念だと言っていた。四年後楽しみにしているとも言っていたぞ」

あー！それでもない！っとそうか今年も会えないのか。普通立場が逆だろうに。

ん？四年後ってことは学校四年間しかないのか。

いや初等部とか言ってたし高等学校とかもあるのだらう。

けど、一応長期休暇とかあるはずだし厳密に四年後に会ってことはなさそうだ。

嬉しいけど、多分また学校の中で最高級の〜とかなんだろうなあ。

確かに酷い学校とかには行きたくないけれども、毎回毎回一番！なんて一番のありがたみが薄れると言つか、少し勿体無い気がする。

贅沢な悩みだけだね。

……ん？おかしくないか？なんで私の誕生日のすぐ後に学校に入学するんだ？

「ダニエル父さん、明日って学校の入学式なんですか？」

「いやいや、そうじゃない。入学式は半巡り前だ。だが問題はない。お前は八歳になったんだからな」

それ全く理由になってないよ！

つまりは編入ってことか。ということは……

「一年早く入学させたということですか？」

「うむ、さすがエリック。ちゃんと理解してるな」

つまり、満八歳で入学するのではなく満七歳で入学するということ。

父さんも無茶するなあ。

「編入試験があるはずだがお前なら問題ないはずだ。なにせ五歳で

四原則魔法を使うことができたんだからな。学校で思っように過してきなさい。あんな地下室なんかでやらないで」

うわゝ、父さんの氣遣いが痛い。

いつかはバレると思っていただけ結構早かった。

うーん、秘密地下室が秘密でなくなったのはちよつと痛いかな。

あの地下室は基本四原則魔法でつくった妄想作品親は知らず秘密地下室だったりする。

自分の部屋が一階だったし、床の一部分をぶち抜いて結構大きめの地下室を作った。

問題はどうかやって土を掘り起こすかだったけど、掘りだすのではなく、地魔法で土を押し固めて空間を少しずつ作り出していった。固めた土は壁代わりにして無駄が出ないように。

家が倒壊しても困るからそこそこでやめたけど。

まあ、それはそれとして。閑話休題

「ありがとうございます」

ちゃんとお礼は忘れずに言っておかないとね？

朝食までの道のりも訓練（後書き）

武器に関して伏線を2つほど張らせて頂きました。

すでにお気づきな読者様もいるかと思えます。

ただどその武器の一番複雑で一番必要な部分がまだ残ってますね。
どーするかって複雑にしない方がいいんですよ。

それでは次話で。

別視点はまだまだ書けてません書けません。

もう一つの大事なメイドさんとの訓練（前書き）

今度は記憶に関して書いております。

これもまた独学ですので一切責任は取りません。

もう一つの大事なメイドさんとの訓練

記憶

記憶に関する事で重要になってくるのが「海馬」と呼ばれる脳の一部である。

この海馬は目や耳など人体から入ってくる情報を一時的に記憶する。

その後、記憶を分類する器官と言われている。

記憶には短期記憶、中期記憶、長期記憶があり、完全記憶能力というのはこの前者二つを強制的に長期記憶に保存することだとされている。

脳の神経はシナプスという管が通っており、それが脳神経同士を繋いでいる。

その数が多ければ多いほど脳の能力は高くなっていく。

海馬は鍛えたら鍛えたぶんだけ脳細胞とシナプスが多くなる。

が、幼少期3〜5歳までに脳の能力は、ほぼ決まってしまうと言われている。

さて、私が入学するヘルムート学園だけど、ダニエル父さんの出身校でもある。

結構優秀な成績で卒業しているけど、同じぐらいやんちゃもやっていたらしい。

その二つは比べるものじゃないと思うけど。

悪戯
サプライズ好きのダニエル父さんらしい。

満七歳で入学

こんな無茶が通ったのは卒業者だからなのか、貴族だからなのか…

…どっちもか。

学校の話を聞くと

- ・成績は単位制
- ・寮ぐらし
- ・ストレートの卒業者は全体の半分
- ・留年は二年まで

・入学者は結構多く、中流家庭の下でも金銭的には十分に入学可能
・特別入学枠があり、その場合金銭面で負担はゼロ

しかし条件は結構難しく、八歳以下で四原則魔法（火、水、風、地）の全てを簡単に扱える。

または、上位三原則魔法（雷、重力、治癒）のどれか一つ扱える。

また後者の方が多く、前者はまだ一桁であるらしい。

さらに重力魔法は、最上位二原則魔法（光、闇）をも上回る発動し
難い魔術として知られている。

私は五歳でコレを満たしているから驚かれるのは無理ないね。

- ・図書館の蔵書保有率は五本の指に入る
- ・魔法学校には魔法を使いやすくする特殊な魔法フィールドを持っている（正確には魔法フィールドの近くに学校を建てるらしい）

私は特別入学校を使って四原則魔法を披露することになるらしい。

ちゃんとお金は払うとのこと。

「学校の説明はコレぐらいだな。では誕生日プレゼントだ。受け取りなさい」

「え？」

魔法学校入学
コレが誕生日プレゼントじゃないの？

と、思っていたらいつの間にか青白く光っている金属塊インゴットを持っているヘルルドさんが横にいた。

銀にしては自己主張が激しいな。

というかいつの間に私の横に……。さすがは専属執事。

「魔力との融和性が高いミスリル金属だ。魔力を流しこんでやるとその魔力の持ち主に応じて形を変える不思議な金属。要はイメージだな。固まった時の硬度はそこの金属じゃ歯がたたない代物だぞ。四年間の誕生日プレゼントでもある。剣にするなり、盾にするなり、自由に使ってくれ」

「……………」

二度目のサプライズですかそーですか。

少し落ち着いてミスリルについて考えよう。

ここでは魔力を流し込むと形を変える金属。

それは剣に盾に形を変えることが可能。

イメージでいいのなら流体状態で止めておくことも可能っぽい。

訓練しなくても自在に鞭を操ることが可能って考えてもいいかも。

まあ簡単にすると魔法版形状記憶合金という感じなのかな。

そして、また出たよ四年間。

両親は私が学校に行ったら休暇の時にも帰って来ないと思っているらしい。

そして一番の問題。

このことを学校入学と同時に持つてくるということ。

私は今すぐにもこのミスリルを研究・実験してみたい。

つまり、私の性格を知らながらここで渡してくるということ、それは学校に持つていけと言っているのと同じ。

盗難の可能性考えてる？

絶対コレ高いよね？

ええ、愚痴だつて言いたくなりますよ。考えたくなりますよ。こんなサプライズなんて予想できないし、知っていても飛び込んだじゃうし。

本日二度目のニヤニヤ顔の父さんは御満悦のようだ。

だけど今はそんなことはどうでもいい。

妄想を現実にするために足りなかった重要なピースが埋まったのだ。魔力との融和性が良く、硬度も高い。なら後、必要なのは己の知識と妄想のみ！

「ありがとうございますっ」

椅子から立ち上がり最敬礼よりも深い礼をした。

私はもう失敗しない。

コレを力に、生き得るために、変えてみせる。

私は今とても忙しい。

ダニエル父さんから確かに素晴らしい物ミスリルインゴットをもらったし魔法学校入学気遣いもして
もらったけど……。

「明日の早朝に出発なんてやっぱり無茶だ！」

「愚痴を言う前に準備を速くしてください。それとも今日の分の訓練はやっぱりやめにします？それなら時間も取れると思いますけど」

「これから四年間はアンナさんと訓練できないんだからそんなことは言えないよ」

色々と準備が必要でどうにもならない。

またアンナさんと訓練ができなくなる。

2つとももう五年間も続けてきている事だ。もはや毎日の習慣。

水で顔を洗うような当たり前。

訓練は継続なり、継続は力なり。

元々、そこまで結構なハードスケジュールを組んでいたわけじゃないけど準備に時間が取られることは予想できる。

父さん、サプライズに対するこっちの労力を少しは考えてください。

お昼で一旦休憩を取りまた再開したものの、結局は夕方までかかってしまった。

「では今日の訓練を始めます」

「はい」

2つ目の訓練は結構単純。

紙に書いてある点を数えて声に出しているだけ。

ただし、一秒以内にその紙は変わっていく。

これはフラッシュ・カードと呼ばれる訓練法でこれも主に右脳を鍛えるものである。

能力で言えば瞬間記憶能力や瞬間判断能力を高めることになるだろうか。

この訓練は特に脳が周りの環境に応じて脳のネットワークが発達しやすい3〜4歳の時にこの方法で、脳の細胞を活性化させるようにするとより高い効果を発揮する。

私はこの訓練法を中学2年生の時に知ったもので特に完全記憶能力に憧れている時でもあった。

そしてこの年齢によくある特有の病を患っていた。

中二病である。

そして中二病特有なのか、異様なまでの集中力を発揮し、これを習慣付け、結局は転生する事になった事故の日までずっとやり続けていた。

瞬間記憶能力とまでは行かなくても効果を実感するほどに記憶力は

良くなり、判断も早くなった。

そう、あの事故で横に避けることは無理と判断できたのはこの訓練をしていたからだと思う。

だけど、三歳からやり始めたからなのか、効果の程が段違いだった。

その効果といえば……自分が集中した時、つまり「これを覚えたい」と思ったときに見たものは忘れないようになった。

完全記憶能力とはいかなくても、擬似瞬間記憶能力と読んでいいと思う。

判断能力はどうなっているのかわからないけど多分良くなっていると思う。

まあ結局は測れるものじゃないしね。

八歳になっても辞めるつもりはなかったけど、能力としては十分な領域に入っていると思うし一旦休憩ということで。

ここからは四年間魔法だけにつき込むことになると思うし、事実そうなるだろう。

だから今日の訓練は潰したくはなかった。

「はい、今日の訓練も終了です。お疲れ様でした」

「ありがとうございます」

「それでは今日はしっかりと体を休めてください」

「はい」

「部屋の掃除は任せてくださいね。四年後に帰ってきた時もこの状態を維持しておりますから」

「アンナさんも四年間ずっと帰ってこないと思ってる？」

「もちろんですとも。エリック様ですから。自分でも四年間、私と訓練できないなんて言いましたしね？」

「どうやら私は本当に四年間家に帰ってこれないらしい。」

もう一つの大事なメイドさんとの訓練（後書き）

訓練はやっぱり地味であるべきなんです。

でも、この小説はかなり戦闘描写は少ないか短いからです。

魔法系統は基本これで全て出ました。

後はオリジナルですね。

めだ。ボックスのあるセリフを借りますと、

伝統的に評判の悪い、修行パートなんてのを地道にやってる

ってことになりますかねこの小説は。

心に結構ダメージ受けましたけど作風は変えないつもりです。

魔法に関わり続けました（前書き）

魔術の詠唱ってやっぱり恥ずかしいものですね。

魔法に関わり続けました

筋肉痛

トレーニングには付き物とされている筋肉痛。

筋肉痛になる理由は幾つかあるが、私は「筋肉が回復しているときに出る痛み」として認識している。

そして、筋肉の回復は筋肉の質を高めるものでもある。

詳しくすると、傷つくことによって回復するとき、筋肉の繊維同士がより強く結びつくのだ。

そして、筋肉痛はその体に対して弱い運動であれば比較的早く出て、強い運動では遅く出るらしい。

「気高き強固な地の意思よ その身を現世に映し出せ」

小石が私の手元から足元に落ちて転がった。

「はい、地属性魔法も問題ありませんね。それではこれで編入試験を終わります。結果は合格ですので授業は明日から受けてください。では、これから寮に案内しますね」

「わかりました。よろしく願いします」

編入試験の特別試験が終わったけど、……体が非常にだるい。

馬車や船やを乗り継いで五日間。

衝撃吸収装置とかまだまだ開発されていない乗り物と、整備されていない道のコラボレーションとか……あれはかなり体に負担をかける。

馬車でも船でも揺れが酷く、ミスリルを調べられる環境じゃなかった。

衝撃吸収装置や素材は私が開発してやろう！と本気で考えたけど、作るのなら自分だけの馬車を持った時に作って載せるだけになると思う。

この技術も悪用される可能性は十分にあるしね。

技術発展は私がやらなくてもいつか良くなっていくと思うし、万能な魔法あるし。

とか考えてたら寮と思われる建物まで来た。

見た目はアースの一昔前の校舎みたいだ。

木造で結構雰囲気がいい。

そして、私の部屋に案内されると、本来二つあるはずのベットが一つしかなかった。

考えてみれば当たり前で、こんな時期に入学してくる人なんてそう
そういないし、奇数人数部屋を作ったりして、生徒に余りが出ない
ように振り分けされているのだろう。

そして私が入学してきたから私が余ったと。

貴族だからとかそんな理由じゃないことを祈るばかりだ。

「ここがエリックさんの部屋になります。明日、あなたを受け持つ
先生が迎えに来ますから」

「そうですか、案内ありがとうございます」

「では、ヘルムート学園で頑張ってくださいね」

笑顔を浮かべながら案内の人が帰っていく。

部屋は二人用に作られていたのだろうけど、自分の部屋と比べて同
じくらいだ。

まあ本当は比べちゃいけないんだろうけど……。

階層は一階で、楽だと思ったんだけど、一番端なので結構遠い。

正規の道で学校まで歩いて行くのはすこしばかり面倒そうだ。

まあ何はともあれ、今日はこの疲れた体を布団で癒すとしましょう
か。

次の日、だろう多分。

ガラスなんてこの世界では高級品であり、一般の寮になんてついてはおらず、したがって窓はない。

そんな訳で朝日なんて部屋に通るわけない。

が、体に覚え込ませた起床時間になるとエリックは目を覚ました。

しかし、目を覚ました時、エリックは体の異変に陥っていた。

（体が全く動かせない……金縛り！？）

体は全く言うことを聞かず、寝返りや指の先さえも動かすことができない。

金縛り。それは俗に言う脳が目覚めて体が目覚めていない状態である。

（これ絶対まずいよね）

私がここにいることはまだ先生ぐらいしか知らない。

したがって盗難ミスリルの可能性はかなり少ない。

けどやっぱり不安なわけでした。ええ。

移動中、私自身澄ました顔をして内心どんだけ焦っていたか。

そもそも澄ました顔ができていたのか。

……駄目だ、思考が空回りしてる。

とその時、私にとって今一番、聞きたくない扉が開く嫌な音が響いてきた。

（ノックなしですか！）

よし、ツツコミのキレは悪くはない。少しは冷静になったか。

というか、鍵は？かけ忘れてた？というか私は部屋の鍵の確認をしたか？

疲れはててさっさと寝て、部屋をあまり見ることなく昨日終了ベッタインした気がする。

と言っただけそうだとコレ。

これからどうする？体全く動かせないからか、私に気づくこともなく、私からも侵入者が見えないからすつごく不安だ。

えーと！

「どちら様ですか！」

おお、声出せた。金縛りが解けてきたかな？

というかどちら様って……。

侵入者に対して丁寧語ですか。

とかそんなこと考えてたら人の気配がない。

逃げたかな？まあびつくりするよね。当たり前か。

ということで当面の危機が去った中、この動かない体をどうするか。

というかちょっと待て、扉開きっぱなしとかそんなそんなこと……あるよね？

体よ動け！——痛い！！

え？痛い？まって、コレ金縛りじゃなくて……

筋肉痛？

えーと、確かに五日間ガタガタと体を揺らされてたけどそれだけで筋肉痛ですか？

しかも五日間の後半に筋肉痛が出なかったと言うことは、筋肉痛が出るまでに時間がかかったということ。
四十八時間以内

移動だけでここまでの筋肉痛が来るということは、筋肉はかなり老化しているということ。

いやいや、老化はないでしょ。通常より筋力が低いとか弱いとかにしておこうよ。

でも考えてみたら当たり前だ。

市場に何度かアレンくんに会いに行ったぐらいでほとんど体を動かすことなんてやっていない。

ほぼ完璧なる引きこもり。
自室警備員

……確かに今日が何日だとかお金の価値観とか全くわからない！

ミスリルだって本当はどれだけ高いのかわからないし！

これはガチだ。ガチの引きこもりだ。

これは本格的にまずくないか？

こんなので学校での寮生活やっていけるの！？

時間が解決してくれることを祈ろう。真摯に願おう。

うん、でこの動かない体は結局どうすればいいのだろうか。

……魔術があるじゃないか。

えっと。

「天から命ぜられし聖の意思よ 清らかなる大地に満ちるその力
盾となりて蝕む悪しき者から守護し 羽衣になりて抱擁せよ」

ふう、なんで治癒魔法になると初級魔法で四小節もあるのやら。

口を動かすのも億劫だったというのに。今はもう大丈夫そうだけど。

まあ初級魔法だからか体の節々はまだ少し痛いが起き上がれないほ

じゃない。

とりあえず、扉を閉めてから顔でも洗おうかと考えていたら――
――五歳まで家庭教師をしてもらっていたユアンさんがそこにいた。

魔法に関わり続けました（後書き）

別視点の話を書いた時、その時間帯に合わせるため、割り込みをしてみようかと考えています。

家庭教師と貴族の息子の再会は学校の教師と編入生徒という立ち場で（前書き）

少し遅れちゃいました。

誤字脱字、改行のし忘れなどの確認作業をしていないので、もしあったらバンバン言っちゃってください。

家庭教師と貴族の息子の再会は学校の教師と編入生徒という立場で

治癒魔法

肉体に関する魔法。

この世界では上位三原則魔法に分けられている魔法の一つ。

本にはこの魔法で、人間の体が治療できることについて当たり前のように書かれていた。

つまり、どうやって、どういうふうに治療しているのか不明。

この魔法は「自分の体の細胞が活性化するような感じ」にイメージすると成功しやすい。

が、この世界は魔法が万能なため、身体についての研究はアースに比べたら天と地の差があるだろう。

つまり細胞という言葉すらないかもしれない。

イメージは一人ひとり違うが、この世界の住人はどうやってイメージしているのか少し興味がある。

練習は不定期で、私が何らかの傷を負ったときにやる必要があった。

失敗回数は不明。

三歳半の頃に軽い怪我をしたのでそこから思い立ち、上位三原則魔

法の本をアンナさん^{メイドさん}に買ってもらい練習開始。

六歳の半ばぐらいに習得した。

筋肉痛を治すことにも使えた。

が、筋肉痛を治癒魔法で治したためか筋肉の超回復の効果が薄いと思われる。

仮説になってしまっけど、治癒魔法は実際に細胞の活性化をしているわけではないと思われる。

検証は正確な実験結果を得られないと思われるので割合する。

三年前まで私の家庭教師をやっていたユアンさんは扉の前でなんとも形容しがたい顔をしてつつたっていた。

……まさか、治癒魔法を見られてた？

うーん、見られても問題ないかな？

いや、どうなんだろう。

八歳

上位三原則魔法

この年で治癒魔法が使えるのは一応この学校に特別入学できるぐらいの珍しさだ。

片方だけ条件をクリアしていてもおかしくはない。珍しいだけですむかもしれない。

なら両方の条件をクリアしている場合はどれだけの珍しさになるのだろう。

片方は五歳で出来ているのはユアンさんも知っているけど……。

「……ここは学園だから言葉遣いも崩させてもらうし先生と生徒の立場でエリックくんと呼ばせてもらうけど、治癒魔法を習得したのかい？」

「え……、ええ、ユアンさんが家庭教師をやめた後でも鍛錬は欠かしたことはありませんから」

「いったい、そんなに勉強して何をやりたいんだい？」

「いえ、勉強するのが当たり前だと思っているだけですよ」

「へーえ、もっと子供らしくしたらいいと思うんだけどな。貴族の子供という立場からくる重圧プレッシャーがあるから仕方ないとは思っけど」

「スイマセン嘘です。勉強嫌いです。ただ魔法が楽しいだけです。」

ゲームみたいに練習したら自分に力が付いていくという事がたのしかったからなんです。

魔法を研究
ただ妄想を實現化していただけなんです。

アースでの学校で何に使うかわからないようなものを勉強するより何十倍もマシだったからです。ええ。

やっぱり目に見える変化っていうのは原動力になりやすいよね！

つと、とりあえず、

「えっと、先生がここに来たということはそう考えていいんですよね？」

「ああ、説明があつたんだね。そう、僕がエリック君の担当だ。君が入学するって聞いて担当するクラスに入れてもらったんだ」

「また会えるというのは教師だったからでしたか。ということはここに入学することはもう決定していたわけですね」

「まあそうだね。まさか半巡り（半年）ほど早く入学するとは思ってなかったけどさ、ダニエル様も無茶するね？」

「まあダニエル父さんですから」

ん？そういえば父さんってどうやって地下室の存在を知ったんだろう……。

聞くの忘れてた。ああ、四年間は謎のままなのか。

ユアンさんが担当しているクラスで、私が振り分けされるクラスに移動中。

クラスにはレベルがあつて、ユアンさんのクラスは上から二番目らしい。

私は特別入学してきたからそれだけの実力はあると言われた。
四原則魔法が使える

クラス分けの方法は魔力の大きさに決めたんだとか。

進学すると今度は魔力だけではなくその魔法の技術レベルも考えられてクラス分けがされるらしい。
精度や魔力効率

結局、私の魔法について結論から言うと八歳で精霊や神の加護が無い一般人が、上位三原則魔法を制御できている、習得できているというのは非常に珍しいらしい。
エリック
いわゆるチートのような特別

こと魔力の制御ということに関してはこのまま成長すれば計り知れないとか何とか。

「その上の最上位二原則魔法を制御、習得できていたらもう天才とかじゃないね。天才の前に異常とか付いちやうんじゃないかな？」

「はあ……そんな事になるんですか」

「二原則魔法の制御の難しさは三原則魔法の比じゃないからね。発動の難しさだったらイメージしにくい重力魔法だと言われているけど」

つまり、私は世間一般では異常な天才というわけだ。

天才か……。

自我^{転生}の確立というアドバンテージがあったにせよ、毎日の努力の結果なんだけどなあ。

そのふた言だけで私の五年間の訓練が片付けられてしまうのはなんともやるせない気持ちになる。

天才とか呼ばれてみたいと思っていた時もあったけど、その時の自分を罫に嵌めてやりたくなってきた。

「エリックくんも十分に天才の域にいるけどね？」

「努力の結果ですよ。ユアンさんも私の家庭教師をしていたのですからわかりますよね？魔法に対してのセンスはそこまで高くはないと」

魔法の使い方の発想^{妄想}はあるけど、魔法や魔力について元々知ってい

たわけではないから加護を持った人たちにはどうしても敵わない面があるだろうし。

「うーん……そうだね。天才だったとしても努力をしないと才能を埋もれさせるだけだからね」

某格闘マンガのムエタイの人も「十歳で神童、十五歳で才子、二十歳すぎればただの人」と言っていたしね。うん。努力は必要だ。

……よし、こじつけ終了。納得した。

それにしても家庭教師は本物の教師だったとは。

ん？ユアンさんが教師？

「ユアンさん、私の家庭教師をやっていたときはこの学校での授業はどうしていたんですか？」

そう、このヘルムート学園まで片道五日間かかるのだ。

七日に一回しか家庭教師をしなかったとはいえ、これではヘルムート学園から家まで往復することすらできない。

「ああ、そのことが。実はちょっと無理矢理にね……」

ああー、遠い目だ。遠い目をしている。

「父さん……ですか？」

「まあそうだね。急にダニエル様専属の執事が来て『休暇をとって

「ダニエル様の息子の家庭教師になれ」なんて言われた日にはね……」

ヘラルドさん何やってるの!?

「というかそんなことを頼める関係を持っている父さんとユアンさんのつながりって何!?

「で、無理矢理休暇を取らされて魔法で移動してダニエル様に話を聞いたら『3歳児に教える』なんて言われてサプライズ以外の何物でもないと思っただね」

「サプライズだね。傍から見たらおちよくっているようにしか見えないね。それ。」

「まさか本気で教えることになるとは思ってもいなかったけどね……それが一番のサプライズだよ」

「ま、まあ二年間の休暇ってことでどうか一つ」

「結果的にはそうだったからいいんだけど、その後ここに戻ってきたときは、まあちよっとね……」

父さん、無茶すぎです。

前に予想外だと思ってたけど、ここまで壮大に迷惑かけてるなんて本当に予想外デス。

けど気になるキーワードがあった。

「魔法で移動って言ってましたけど、何魔法を使っただけで移動なんで

すか？」

「重力魔法だね。馬車の重さや馬そのものの重量を減らして移動スピードを速くすることだよ。重力魔法は僕は使えないけど魔法具を使って魔力を流しこむことでどうにかね」

なるほど、発動がしにくい重力魔法は魔法具が一般的ということか。ちなみに魔法具というものは魔力を貯蔵する性質のある石や金属材料に魔方陣や刻印が書いてあるもので、アクセサリのような小物のような物もあるらしい。

まだ私は見たことないけど……。

「はい、エリックくんが入るクラスに付いたよ。それじゃみんな年上だけどそんなことは知らないはずだから気楽にね」

と言ってユアンさんは一足先に入っていた。

この教室に入ったら周りは皆年上でユアンさんも先生と呼ばなきゃいけない。

（さて、魔法学園生活。初等部の四年間、頑張りますか！）

脳内年齢は二十五〜六歳だけだね。

家庭教師と貴族の息子の再会は学校の教師と編入生徒という立ち場で（後書き）

はい。全く進みませんでしたね。

ユアンさんとの世間話だけで終わっちゃいました。

口調の変化を付けなきゃいけないと思ってはいるんですが上手くないですね。

出る杭は打たれるのではなく放置される（前書き）

精神年齢はまだ十六〜十七歳です。成長したとしても十八歳です。だってそれ以上の人生を経験を積んでいませんからね。つまりはまだまだ高校生。

……ってことでいいよね。

出る杭は打たれるのではなく放置される

編入生

それは正規の方法、つまり新入学したのではない生徒の事を言う。

編入生はその生徒の技術や精神などの発達に応じた学年に仕分けされることである。

この場合は魔術^{世界}に関しての発達具合で仕分けされるのだろう。

つまり、この世界の編入生は一目置かれる存在^{力を持っている}という認識になる。

わざわざ編入という面倒くさい事をするほどの『生徒』として見られてしまうのだ。

つまり、どういうことが起こるかというところ——

関わってこないのである。

妄想終了。

うん。多分コレが理由だろう。私がぼっちになっている理由は。

入学から一週間。

私は誰とも接触がなかった。

いや、話しかけなかった私が悪いといえば悪いんだけど。

……私は友達とずっといることには息が詰まる。

ただ適度に関係を持つていうだけが一番楽で一番妄想がしやすかった。

そして一番関係が深かったのは兄さんだった。

家族だったからというのもあるかもしれない。

まあそんなことは置いておいて。

そう、友達がいないのだ。

妄想をしている時が多いから必然的に一人でいることが多い私だが、学校に来て友達が一人もできないというのはそれはそれで寂しいと

思う。

普通は誰かが質問しに来る場面じゃないのか、転入生や編入生って
いうのは。

まあ愚痴っていても仕方ない。

結局はやることは変わらない。

私はここに魔術を学びに来たのだから。

よし、問題ない。

さて、今日の授業の始まりである。

熱血先生とか私は嫌いな部類である。

「さて、このことから魔力フィールドで魔術を使えば魔力はどんどん上がります。

ただし魔力量が多くなっただけではダメです。

ちゃんと魔術語を理解して、しっかりとちょうどいい量の魔力を使つて、ちゃんと魔法を使ってくださいね。

では今日の授業はこれで終わりです」

と、ちょっと厳しそうな性格をしていそうな女性先生が出ていった瞬間、一気に騒ぎ出すクラスメイト達。

やはりまだまだ子供^{八歳}なんだなあとか考えつつ誰よりも早くクラスから出て寮へ歩いて行く。

授業の内容はつまらないとは思わないけど、先生がなんか幼い感じ
と言つか子供を諭すような言葉遣いだからかとっても面倒くさい。

というよりやる気がどんどん失われていくような気がする。

個人最大魔力量の増大の授業なんて私にとって重要な情報なのに。

あんな言葉遣いじゃ『魔力フィールドでは魔法に対して使える魔力
量が増えて威力があがる』だけのようにも聞こえる。

間違えて覚えてる人も出てくるんだろうなあ……。

二つの意味で取れるのであればそれは文章として微妙な気がする。

私は文系じゃなくて理系だったからそこまで拘るつもりはないけど。

このヘルムート学園の魔力フィールドは、学校の周りに生い茂って
いる密林の奥に泉があるらしく、そこが魔力フィールドとなってい
るらしい。

その泉に行く道はなく、獣道でさえほとんど無いため迷いやすいの
だが一人として遭難者は出ていない。

授業では先生引率の元、少人数グループで監視されながら魔法訓練
するのだとか。

ユアンさんに話を聞くと、一人で泉へ行き魔法の練習をしようと考
えていた生徒はこう言っていたらしい。

「まっすぐ奥へ歩いていたらと思ったたら、いつの間にか学園に付い
ていた」

その後、泉までの道程がない事を生徒達が『ナチュラルクス自然の要塞』と呼ぶよ
うになったらしい。

だけど、流石に学園側もそれだけでは不安で、生徒が勝手に入り込
まないように対策をしている。

初等部と併設している高等部の授業の一環として十五歳以上の先輩
たちが監視しているのだ。

もし、初等部の学生にすり抜けられてしまった場合、その監視して
いたグループは罰を受けるのだとか。

この学園の敷地内も魔力フィールドに近いお陰で他の場所よりは十
分に大気中の魔力が濃いけどね。

さて、それじゃあ最大魔力量の増大のために……準備してから魔力
フィールドまで隠密行動といきますか。

あ、ダンボールってこの世界にあるのかな？

出る杭は打たれるのではなく放置される（後書き）

ちょっと短くなってしまいました。

さてさてスニーキングの始まりです。

一週間でもう校則を破ろうとする。

不良な高校生ですね。

バツサリカットする予定はありませんが、単調になってしまつかも。
一般人は気配を隠すとかそんなことはできませんしね。

望は前世では主にマンガやゲームから妄想を膨らましていきます。
この世界にはそれらはありませんが、魔法というファンタジーでフ
ァンタスティックな物（？）があるんですから退屈はしないんでし
ょうね。

中盤らへんの授業の内容はどうでしょう。

もし不評なようならコメントとかしちゃってください。

悩みに悩んで完璧に書きなおしてやりますから。

これも一応隠密行動？（前書き）

特にありません。

少し短いぐらいですかね。

これも一応隠密行動？

スニーキング

スニーク（sneak）の進行形でのスニーキング。
スニークの意味はコソコソするなど。

だから隠密行動でスニーキング。

スニーキング・ミッションで潜入任務。

……英語ってやっぱりめんどくさい。

追加

ゴム靴などのことをスニーカーなどと言っけどこれはスニークから
来たらしい。

これは面白い。

でも英語は苦手だ。

ここは、ヘルムート学園校舎裏。

「はなせ俺は泉に行ってもっと強い魔法を使っただけ」

「はいはい、残念でした。誰がいる？この子を今日の見張り担当の先生のところに連れて行ってあげて」

「うーい了解。んじゃいくぞ坊主。風魔法を使って追い風を作るのはいいがもう少し効率よくいかないかな？」

「俺はもっと強くなりたいんだ。ちくしょー、もう一度挑戦してやるからな！」

「でかい魔力で強い魔法を使うことを目指すより、ちゃんと魔法の使い方を勉強したほうが早いと思うんだがなあ」

「私は魔力を強くしたほうが早いと思うけどね」

「相変わらずだな。その思考を持ちながら小手先の技術もつまいてきてやがる。あーあ、持っている奴は楽でいいねえ」

「うるさいわね、私より魔力の制御が上手いくせに。さっさと行って来なさい」

「はいはい」

「ちくしょー、もう一度挑戦してやるからなあ」

体格のいい男性が男の子をがっしり捕まえてどこかに運んでいく。

やっぱり考える事は同じか。私もまだまだ子供か。

だけどこの好奇心に背いて生きていくなんて私の人生じゃないね。

さて、一人減ったわけだけど、今日は多分高等部の上級生や実力が高い人を見張り担当にしているはず。

今日の一年目のクラスは魔力フィールドについて勉強したはずだから好奇心が高く、チャレンジスピリッツ挑戦の精神の塊みたいな子供はすぐに行動に移す。

たとえそれが校則違反だとしても。

だから授業が終わったの放課後、つまり今日は見張りにとって今日はお客が沢山来るわけだけど……。

しかし、今日の見張りは本当にすごい。

半年魔法を学んだ
初等部一年目の生徒が相手なら魔法を使うまでもないですか。

なら、五年間魔法を学んだ私ならどこまでいけるかな。

ただ今回の作戦としては転生者スニッキング。

相手の実力を発揮させないまま突破する技術、方法。

というわけで早速いきますか。

「今年の一年生は良い子が多いのかしら」

「いやいや、ただ単にここに来る子がいないだけだと思っよ」

「あ、見回りご苦労様。どうだった？」

「四人捕まえたかな。どの子も張り合いがない」

「いやいや、初等部の一年生に何を期待しているのよ」

「ふふ、期待したくもなるよ。なにせ一週間前に四原則魔法を使っ編入学て特別入学してくる子供がいたんだ」

「え？何それ聞いてない」

「今知ったんだからいいじゃないか。少しは自分で情報収集したほうがいいよ」

「情報収集を趣味にしているあんたに聞いたほうが早いでしょ」

「やれやれ人使いの荒いことで」

「で？あんたはその子が来ると思っているわけだ」

「そうだね、この時期にこの学園に編入学をするなんて普通にどう考えてもおかしい。ならその子供は普通じゃない。なら好奇心は大盛だ」

「その微妙に自信満々な所は置いといて。編入学しただけで好奇心が大盛と考えるのはちょっと飛躍しすぎているような……」

「そうでもないと思うけどね。……案外もう抜かれているかもね？」

「え？」

慎重に硬度を落として羽が木々に引っかかる前に変形させる。

そして一時的に風魔法を強くして落下速度を落とす！

トンツ、と軽い着地音がして私は地面に降り立った。
エリック

ふう。光魔法解除つと。

重力魔法に風魔法、光魔法を三つ同時に使うのはやっぱり神経使うなあ。

重力魔法を使って私だけを軽くして、その軽くなった体を風魔法で運ぶ……予定だった。

だけど、軽くなったといってもせいぜい体重を十分の一にする程度。だから一週間かけて自分の魔力を練り込んだミスリルを使うことにした。

鳥。間コンテストをモチーフにして羽を作った。あれには感動させられるね。うん。

羽が金属だからそれなりに重いけどかなり薄く作っても壊れることがなかったから採用した。
ミスリル

お陰で空を飛ぶことに成功。

魔法で風を操ることができるからプロペラみたいなものいらなかったから作るのは簡単だった。

もつとも、重力魔法がもつとしつかり使えるならこんな事にはならなかったけど。

まだ自分の体重を^{自由に操作}重くすることもできないし……。

まあだけど、^{空飛ぶだけ}それだけじゃ見つかるから光魔法で自分の周りに光の屈折を起こして迷彩する。

自分の周りに球体みたいな物を貼り、そこに来る光を微妙に屈折させることで自分がいるところは空に見える。

そしてもし、私がいなかったら見えるのは空。

だから私が見えなくなる。消えたように見える。

でもやっぱり完璧じゃなくてカメレオンの^{微妙に膨らんだりしている}擬態レベルにしかならない。

動くとき微妙に不自然になるし。

さらに^{相手が私を見上げる}有効的に使える状況が限られているから多用もできない。

けど遠目からなら十分に効果を発揮するから今回は問題なし。

今回は羽も囲う必要があったから結構魔力を使ったけど……。

いつかはものを使わず重力魔法と風魔法だけで浮遊魔法の真似事をやってみたい。

ということ、名も知らない高等部上級生と異世界転生した初等部一年生の勝負はこっちの勝ちということ。

さて、ナチユーラルクス自然の要塞に勝負を挑みにいきますか。

これも一応隠密行動？（後書き）

はい、書き終わりました。

自分にとっても隠密行動ってこんなだったけ？と疑問に思いましたが、ここは異世界。

魔法があれば隠密も変わるってことで。

技術的に、将来的には出来そうなものですが。

妄想がくだらないって？

そんなくだらないことを考えている時もあるさ。

光学迷彩のくだりはただ単に「光魔法での迷彩」と書いた方がいいのか迷いました。

結局だらだら書きちゃいましたけどね。

もう少しわかり易くしたかったんですが、まだまだ文章能力が足りないです。

あとこの小説に点数評価してくれた人がいました。

その評価に見合うような小説を書こうと努力等させて頂きます。

頑張ります……。

では次回にまた。

私の生き方は早くも否定されそうです（前書き）

かなりお話がぶっ飛びます。

結構なご都合主義です。

全ては貴族の力です。

私の生き方は早くも否定されそうです

ありがた迷惑

人の親切心が迷惑なこと。

例えば、ある場所に行くという目的があり、そのために普段引き受けない種類の仕事などを引き受けたのに他人が親切心で仕事を手伝うとか引き受けるとか言われること。

断って済めばいいけど有無を言わさずやられる時がある。

今が本当にそうだ。

迷惑なことの上ない。

迷惑だ ああ迷惑だ 迷惑だ。

……どうしてこうなった。

どうしてこうなった！？

私は天才児として祭り上げられたくはなかったのに！！

ナチユーラルクス

自然の要塞は突破できた。

というか自然の要塞なんてなかったといってもいい。

実験のため普通に泉に向かって歩いたら普通についた。

拍子抜けもいいところである。

まあここまでは問題はない。むしろうれしい誤算でウキウキしていた。

問題はユアン先生という先客がいたということだ。

私の行動は読めていたらしい。

私が魔力フィールドの事を聞いた時から直ぐに行動に移したのだとか。

つまりは、私の行動が読まれていたということ。

……結構悔しい。

だからって……どうしてこうなった!?

時は少し遡って前日の夜

私はユアン先生に捕まって泉までの道を監視していたグループと一室で向かい合わせに座っていた。

「はい、とりあえず自己紹介からしましょうか。……はいはいポカンとしていないで。先に高等部の方からね」

と、呼ばれたときには迷いがない顔で『チーム代表』を体現している女の子がすくと立った。

「私は……えつと?」

「ああ、必要最低限でいいぞ」

「つまり、そちらの方は王族の方でよろしいでしょうか？」

「「！？」」

……思ったことを口に出さないようにしよう。頭の中で一旦吟味してから声をだそう。

「エリック君、なぜそうだと思った？」

「えーっと……そう、たまたまです。彼女が話し始めて詰まって、その理由を知っているかのようにユアン先生が助けたので立場がとても重要な人だと思ったので王族かな……と」

……だから、思ったことを直ぐに口にしないようにする必要があるでしょうが！！

こんな一挙手一投足から情報を得て鎌をかける八歳なんて見たことも聞いたこともないよ！

ああ、周りの人全員が私を見て絶句している。

この様子じゃ私を除いた全員が彼女の特別を知っているっぽいね。

……駄目だ、泥沼にはまっていく気がしない。

「まあ、そのことは置いておいて。さっさと自己紹介しましょう」

ユアンさん。それは私の仮定を肯定したことになりますよ。もう口を閉ざしますけど。

「じゃあ、初めましてでいいかな。私はキャロライン・アルテミス。まずどうやって私達の監視網を逃れたのか聞きたいわね」

すごい……。さっきは精神的にすごく揺れていたのにもう立て直してる。

王族という立場のプレッシャーに耐えて生きていくってこういふことを言うのかもしれない。

かく言う私も貴族という立場なんだけど。

「はいはい質問は後だ。次行こう」

「俺はクラン・ウイスカだ。よろしく」

この人が初等部の男の子を運んでいった人。

「クラリィ・エルネス。よろしくお願いするよ」

知的な雰囲気をもっているミステリアスっぽい女の子。いや……女性かな。

「アリシア・グローリアです。よろしくおねがいしますね」

少し天然が入ってそうでポワポワしている人。

経験則だけどめったに怒らない分怒ると怖い人と読んだ。

この人は、ここが私にとっても初対面かな。

で、私の番か。

「私はエリック・シルフィールドです。監視網を突破した方法は聞いても答えません」

答えたらまた騒がれる。

「いいもん」

いいの？

「諦めないから」

いや、諦めてください。お願いします。

「はい、ということで今回のチームの罰は留年です」

「え？」

いきなり何を言い出したこの先生は……。

というか高等部にも顔を出しているのか、この先生は。

「ちょっとまってくださいよ先生！俺達のチームだけ罰がでかすぎ

じゃないか」

「そうです。いつもなら十五日間の森での地獄チームサバイバルと
そのための授業遅れを挽回するための補充授業のはずです」

「……私たちはそれだけのことをしてしまったのですか？」

クラリィさんだけじつと先生の次の言葉を待っている。

すごく冷静だ。頭脳面ではこの人が一手に引き受けているのだろう。

「そういうわけじゃないよ。君たちはこの学校を卒業していてもお
かしくない魔法力と、それを扱えるだけの知識や技術を持っている
だからさ」

いや、それだけじゃ罰が重くなる意味が全くわかりませんが。

「つまり、八歳にして自然の要塞という魔術的障害を突破すること
ができるほどの素質を持っているエリックくんは魔法を教えてあげ
て欲しいということだ」

「それは留年でもなんでもないので？」

「そうでもないよ。エリックくんが高等部に入学するからね」

……。

……。

.....はあ!?

「ちょっと何を言ってるんですか!?!」

「大丈夫だ。エリックくんなら高等部の座学にもついていけるはずだ」

「何を根拠に!」

「三歳の時に基本語学を二十日で覚えたじゃないか」

「あつ.....」

そうだった。それが理由か。

確かに初等部の授業はかつたるいと思っていたし、前世は高校生で幕を閉じたけど.....。

「あれから五年も経ったんだ。更に成長していると考えて高等部くらいなら問題ないと思っているよ。魔術的にも座学的にもね」

ユアンさん。ダニエル父さんに精神を侵食されていませんか……。無茶しすぎです。

ということがあり私は今、高等部のクラスにいる。

もちろんその罰を受けているチームのクラスだ。

チームは全員二年生らしい。

それで卒業していてもおかしくない魔法力ってすごいことなんだよなあ。

留年の意味は私に勉学を振るうことで三年に進学することが出来ない可能性がある。という意味合いが強く、私が三年生になれるまで進学できないという意味だそうだ。

単位制どこいった！

けど……コレが一番の問題。

「ねえ、本当にどうやって私達の監視網を突破したのよ。教えてくれないじゃない」

「おいおい、そんなに問い詰めてやるなって。昨日だってさんざん質問攻めにしただろうに」

「だって悔しいじゃない。クラリイだってそう思うでしょ？」

「まあそうだね。私はキャラが言ったように突破方法にも興味はあるけど、これだけキャラという魅力的な女性に質問攻めにされて、まだ口を開かないその精神力の方に興味が出てきたね。まるで八歳じゃないみたいだ」

「すみません、もう勘弁して下さい。結構ぼろぼろなんです……」。

「みなさん、もうそのくらいでやめてあげたほうが……まだエリックくんはこの学校にきて間もないのですから」

「あら、自分だけいい子ぶっちゃって。そうやってこの子の中に入り込んでいく気ね？そうはさせないんだから」

「えっ！？私は……そういうつもりで言ったわけじゃ……」

「だからってお前の所有物でもないんだぞ。ここは男同士だな……」

「何抜け駆けしようとしているのよ！エリック君は私のものなんだから！」

なんで私を取り合っているんだろう。

そして私は誰かの所有物になる気は全くありません！

「おい、授業を始めるぞ。さっさと散れ。そして席付け」

私に……心休まる時間はなくなりました。

つまり、妄想する時間が消えました。

ユアンさん。このお守みたいなたちも高等部の入学に関しても私にとってはありがた迷惑です。

この学園で繋がりができたのは嬉しいことです。

というかこんな馬鹿げた事をしないでください。

この異常とも言える特別措置を、学園上層部の人たちにどうやって話をつけたんだろうか……。

魔力ワールド
私はあの場所にいかないという選択肢はないと思うから、ここに編入学した時から目立ってしまうのは決まっていたのかもしれない……。

私の生き方は早くも否定されそうです（後書き）

この話は難産でした。

活動報告にも書きましたがどうもピンとくる文章がスラスラと出てこなかったので時間がかかりました。

この小説にストックなんてありません。全てが行き当たりばったりのお話です。

何を書きたいかはその日その時、私の気まぐれで決まります。

そしてごめんなさい。

高等部学生の外見は妄想力の乏しい私には無理です。

語学的に書くのが難しかったからです。

「艶やかな髪、真紅のような瞳」とかおりませながら書くのはまだまだ私にはできない芸当です。

髪型や髪の長さなどはこのあとのお話にとって重要なファクターでありますのでそれは後々書くかもです。

つまりは外見等はほぼ読者の妄想で補完して頂く形になります。

ではまた次の話で。

四日以内にアップします。

出すぎた杭は打たれないが目立つた杭は打たれてしまう（前書き）

サブタイトルの意味ですか？

深い意味はありません。

長さが実力、太さや柄などが注目でしょうか。

あんまり深く考えないでくれると助かります。

かなり短いです。

まだ次の文章が纏まっていないのでこうなっちゃいました。

人生と麻雀と執筆作業は上手くないかないものですね。

出すぎた杭は打たれないが目立つた杭は打たれてしまう

魔法（１）

アースでは現実には存在しないと考えられている力。

この世界の魔法は大きく分けて効果魔法と具現化魔法に分けられている。

火の魔法で例を出すなら、『熱』という『効果』を槍の先端に与えることで熱によるダメージを追加。前衛での攻撃としての魔法。

『火』を『具現化』させてそのまま相手にぶつける後衛砲台としての魔法。

と二分化されている。

しかし、風魔法のように『効果』しか無い魔法もあり、一部の魔法研究者はその分け方は不適切であると考えている。

高等部のクラス分けは実力でのランク分けではない。

とは言え完全なランダムというわけでもなく、特に仲の良い生徒^{グル}同士は同じにしてあげるような配慮があるとかないとか。

高等部一年生の場合は入学テストや初等部での成績が考慮されて偏りがないようにクラス分けされるらしい。

これは自分のライバルをクラス外で見つけて競い合い高みを目指し、クラス内と連携を取るようにするためだとか。

さらに、自分と実力が近い人とは連携を取りやすい傾向にあるが、差があると難しい。

自分に自信を持つ事は悪いことではないが、行き過ぎると連携する時などは邪魔になりやすい。

これは実力の高い人によく見られる。

つまり、それらを纏める能力を持つ『^{生徒}トップ』を育てるためのクラス分けとも言われている。

そして、仲の良い生徒同士のクラスを同じにする理由は、緊張感を持つ必要がある授業を行うからである。

つまり、魔力フィールドの監視やサバイバルなどである。

この時のチーム編成はクラス内で行う必要があるのでこんな措置がある。

この世界は人間の肉体面は研究が進んでないけど精神面は魔法での重要な部分だから、かなり研究が進んでいるように思えた。

そして驚いたのがこの世界には初等部と高等部の間が無いということ。

つまり、三年間もの長い休暇がある。

初等部を卒業、基本教育を収めた後、その三年間の間に自分の身の振り方を決めるという目的で作られたのだとか。

このために高等部に来る人は初等部に比べて大分少ない。

が、魔力フィールドの絶対数が少ないために高等部は初等部以上の生徒がいる。

必然的に高等部の大体（というかほぼ全部）が初等部と併設している。

基本教育のためだけにある初等部もあるっばいけどその場合、魔力フィールドは無い。

まあ、学校の格としてはやはり魔力フィールドがある方が高い。

そして大体の生徒は高等部卒業後に王国騎士団に所属する。

高等部は騎士育成学校と称されているほどだ。

そしてその学校を卒業できたならば箔がつくのも当然。

つまり、騎士団に入れる予定がなくても我が子を入学させて『高等部卒業』という泊をつけようという貴族がいる。

例をだすなら、アースでの高校卒という学歴を取りたいといった所だろうか。

だからこそこんな事が起こる。

「なぜ初等部の学生がこんな所にいるんですか！」

「どう考えてもおかしいでしょう！」

「納得の行く説明をお願いします」

「そもそも高等部の授業に付いていくことが可能なんですか！？」

脳筋とまではいかないけど肉体派や実戦派と呼べる先生が入ってきた瞬間、さすがに八歳を攻めることは出来ず、積もっていた不満は先生に対して爆発した。

うん。言っていることはごもつともです。

むしろもっと言っていてください。

騒ぎが少し収まった時を見計らって苦い顔をしながら先生がおもむろに口を開いた。

「あゝ、それに関してだかな？あのユアン先生直々の措置だそうだし、そして先生から伝言も貰っている。」

生徒たち（四人除く）が青ざめながら一気に静かになった。

その雰囲気の変わり様と言ったらなんと言葉にしたらいいのか分からない程だ。

ユアン先生って結構有名なだったりするのかな？

悪い意味でのベクトルだと思うけど……。

ともかく家庭教師の顔と学園での顔のギャップがすごい。

でもこれって見方によっては私はユアン先生の力に隠れている嫌味な子供とも取れる。

……… 考えないでおう。

「——と言っていた。わかったか？」

……… 伝言、聞き逃しちゃったか。

まあ私じゃなくこのクラスの人達への伝言だし気にする必要もないかな。

出すぎた杭は打たれないが目立つた杭は打たれてしまう（後書き）

書き終わりが今です。

いつもなら朝に終わる筈でしたが後半が纏まりきらず、前半を放出する形になりました。

これを書いている時点でもう19時を過ぎているわけですが。

次話が早くなるかどうかと聞かれてもわかりません。

まあ、今回のような少なさではないと思います。

それではまた次話で。

言い回しは日本語の美德（前書き）

会話がすこし変と云うかテンポが悪いです。

どう直したものでしょう。

言い回しは日本語の美德

魔法（２）

魔法の難度としては大別して初級、中級、上級の三つに分かれており、どんどん詠唱が長くなる。

魔法が失敗する理由の一つが『自分が制御できないほどの魔力を魔術語に載せて詠唱する』ことである。

詠唱が長くなることで使う魔力の総量が多くなり、制御できなくなった時点で魔力そのものが霧散する。

詠唱自体に載せる魔力を変えることで威力を操ることも可能だが、一小節の詠唱に載せれる魔力は限度があり、初級魔法の威力はいずれどこかで頭打ちになる。

この一小節の詠唱に載せれる魔力の幅が広ければ広いほど応用が効きやすい。

そして詠唱後、自分が詠唱した『魔法名』を言うことで魔法に対するイメージが強固になり、失敗しにくくなる。

周りから見て同じ魔法でも人によって違う名前をつけていたりする。

時は放課後

「さて、高等部初めての授業だけど分からなかったところってある？」

場所は高等部女子寮。

「私たちはエリックくんの勉強を一任されている。これから色々な意味で大変だと思うから出来る限り力になるよ。それが私たちのためにもなるしね」

リーダー格
キャロラインさん、知的な女性
クラリイさん、ポワポワ天然
アリシアさん、三人の部屋。（
高等部はチーム力向上のために同性は同じ部屋に住む）

「なんでもきいちゃってくださいね」

女子寮に入り、女性の私室に入り、実力トップチームの女性三人に囲まれている状況。

男子なら夢見るハーレム状態だね！

だけど残念、私の意識は女性である。

だから……たとえただけ羨ましくても、八歳
子供に危険な視線や呪詛嫉妬
をかけないでください……。

チーム唯一の男

克蘭さんとは別行動。

というかいつもはこの三人で動いているのだとか。

克蘭さんも嫉妬の対象にはなっているが、お遊び程度のものだったりする。

半年間で必死に築いた立ち位置といった所なのかな。

チーム人数は四人以上がラインだったため、キャロラインさんに引っ張られてそのまま強制的に組んだらしい。

ちなみに、どういった関係なのかは教えてもらえてない。

克蘭さんのことを話している時でもキャロラインさんはかなり自然体だった。

良い仲になるかどうかは微妙といった感じである。

……まあ、そんなことは結構閑話休題どうでもいい。

それより問題は、私がよく考えずに付いていってしまい、作ってしまったこの状況。女子寮の部屋 皆でお勉強この場面。

実際に高等部の授業は初等部より難しくはあったし、先生がハキハキと喋るので進むスピードも早い。

だけど初等部『より』は難しいという程度だったし、魔法に関しての予習がほぼ完璧なために特に理解し難いことがなかった。

魔法授業の他には数学や歴史などの基本科目授業は初等部の方ではぼ習う。

高等部は初等部の復習に近い感じであり、騎士育成学校と称されて名前負けしていないほどに実技と魔法に関しての授業が多い。

私はまあその辺は一週間しか勉強出来なかったわけだけど、擬似完全記憶能力と高校生レベルの論理的思考力で問題なし。

魔力という摩訶不思議で万能なモノがあるためなのか、数式や物理に関することは全くといっていいほど発展していなかった。

歴史はまだまだ分からないことが多いけれど、順次覚えていけば問題ないと思う。

ちなみにここの国の名前がイルガンダ王国とか言うらしい。

今でも自国が日本だと思っている自分にはあんまり興味がない。（戻れるとは思っていないけれども）

……纏めると、分からない所がないのだ。

実技でも、

四原則魔法の火、水、風、地。

上位三原則魔法の雷、重力、治癒。

最上位二原則魔法の光と闇。

これらの魔法を五年間の弛まぬ努力で全ての魔法を制御、習得したのだ。（重力に関してはまだまだただけど）

さすがに大規模な攻撃魔法などを地下だろうと街中で使うことは自重した。

まあそのために搦め手などに特化した『嫌がらせの類である攻撃魔法じゃない攻撃魔法』を作ってみたりもしたから、多少の事なら問題ないはず。——じやなくて！

ええい、今は思考を逸らすな。

ああ……、女性三人組が黙り込んだ私を見て微妙な顔してる。

とりあえず今考えるべき事は、ここをどうやって天才児として見られないように突破するかだ。

これ以上の奇異の目が私に向くのは避けたい。

そしてこれを回避するためにはテストで手を抜くだけでは不十分だ

ろう。

焼け石に水程度の事なのかもしれないけれど、これだけでも人の印象はずいぶんと違ってくるはずだ。

下手にこれ以上目立つたらユアンさんと話に出ていた『異常な天才』なんて飛び越えそうなレッテルを貼られてもおかしくない。

それは避けたい。それだけは避けたい。目立っていいことはあるかもしれないけど、私は自由に生きたいのだ。

鎖こぎのついた人生なんて自由じゃない。

と、いうことで……

「分からない所がわかりません」

「まあやっぱりそうなるよね？」

「わたしたちでも分からない所があったりしますもんねえ」

「……」

この言葉なら普通に授業内容が『理解できていない』とも取れる。

どこがどう間違っているか分からないから授業が分からないのだ。

けど意味を少し皮肉に取ったら『分からない所がない』と言っているようにもなる。

こんな勉強会をする必要がないと言っていることになる。

最後の『分かりません』をある有名な『チツ、反省してまーす』などの同じトーンにしたらわかりやすいかもしれない。

日本語を母国語基本にしていると別の国の言葉でも言い回し等で苦労しないなあ。

そうそう使える場面が多いとは思わないけども……。

とりあえず、今日のところは授業のおさらいをして終了だった。

この勉強タイムもどうかしないといけないなあ。

言い回しは日本語の美德（後書き）

数式は偉人と呼ばれる人が必要だと思ったから発展したのです。
この世界の場合は数式を魔法に変えていろんな分野で発展しています。

小説を書くネタはポツポツあるのに違和感なくつなげていくのは難しいものです。

明日から大学が始まってしまつので更新スピードが多少遅くなるかもです。

この小説ですが総合評価が100pt超えてしまいました。

まだまだ又ルイ文章やテンポが悪い会話文等がでるかもしれませんが精進していきますのでどうかよろしくお願いします。

それではまた次話で。

真実が八割 嘘は一割 黙秘を一割？（前書き）

少し遅れてしまいました。

誤字などの確認をやっていないのでみつけちゃったらコメント等してくれと助かります。

真実が八割　嘘は一割　黙秘を一割？

魔法（3）

魔法の詠唱にも種類があり、全詠唱、短縮詠唱、詠唱破棄、無詠唱と4つある。

短縮詠唱はまだ使い物になったりするものの、詠唱破棄や無詠唱ともなると使えない人が多く、威力も低い。

それを専門に訓練したとしても目眩ましや牽制以上の効果を望むのは難しいと言われている。

だが気休め程度の防御魔法でも詠唱破棄で使えることで戦闘などでの生存率が上がる。

そのため高等部の授業では一部の生徒に限り特別授業と称して詠唱破棄の訓練を行う。

精霊^{チート}や神の加護を受けている人たちはその加護を受けている属性に限り詠唱破棄までなら訓練次第でほぼ扱える。

無詠唱の成功例を出したのも加護を持っている人が最初らしい。

「サバイバルですか……」

あの勉強会からまた一週間ぐらい過ぎたあるなんでもない一日。日替

自主魔術勉強
引き籠もりにより、運動能力が皆無な私にとって辛いであろう実技授業の一つの内容を聞いている。

クラリイさんが中心となって説明してくれていたりする。

「今回はエリック君が入ったために期限が短くなった。十日間を七日間に変えたいらしい。さすがに八歳にサバイバルは厳しいとの意見もあつたらしいけどユアン先生が押し通した。日数削減は押し通した代償みたいなものかな」

日数削減
「それはありがたい事ですけど、私にとってはまだ長いほうだと思うのですが……」

というかユアンさんは私をどうしたいんだか……。

「そこは仕方が無いんじゃないかな？ まあ私達がサポートするしね。エリック君は初等部から飛び級してきた天才児だしどうとでもなると思うよ?」

「いつから始まるんですか?」

「五日後からだね」。この時期はみんな少しだけピリピリしているね。」

「場所はどこでやるんですか？」

「この森を少し過ぎた所かな。泉があるからあまり近いと魔物が強すぎるために少し離れてサバイバルをする。君もいることだしね」

魔力フィールド

「さすがにサバイバルしながら高ランクの魔物と連戦するのは無理があるもんね」

「連戦する余裕ありますか？この前のサバイバルで当たったCランクの魔物の『ラングロック』と戦った時はヘトヘトだったじゃないですか。ギリギリ高ランクに分類される魔物ですけど」

「うつ……いいじゃん少しぐらいカツコつけさせてくれても。だってアイツとても固かったし！」

「私たちが間に合ってなかったらどうなっていたことか……自分の実力はしっかりと見定めておかないと後で痛い目見るよ？ほらエリック君も呆れ目だし」

「そんな事は——『ないよね！？』——はい……」

割り込む程に恥ずかしかったのかな？

こうして見ると『王族に関わりある立場にある人』には全く見えない。

けどCランクの魔物に出会って応戦が可能。

チームで応戦したら当たり前のように倒せるっぽいすごい事なの

だろう。

それがどれぐらいすごい事なのかよく分からないけど……。

魔物がいるってことはこの学園に来る前にダニエル父さんから聞いていたけど、強さやランクの事は聞かなかった。

『学園の威厳に関わる一件
今回は基本安全だし、お前の魔術力なら問題ない』とか言われてそのまま出発した。

学園で実際に魔物授業とかあるし、無理に教えようとは思わなかったのかな。

ダニエル父さんのサプライズ？
道中結構緊張したけどね！

「まあこの時期は少しでも体を鍛える事とかはしといたほうが良いと思うよ」

「とはいえってもやっぱり体力的にきびしいと思います……」

「いっそ荷物はクランに全部持たせちゃったりすれば？」

「エリックくんの分だけかい？」

「いっそ全員分？」

「それはさすがに厳しすぎる！というかメンバーの荷物は持つてはいけないはずだろ！？」

「あー克蘭くんおはよう」

「ふふ、遅かったね」

「なるほど、でもエリック君はそれに当てはまったりするのかな？
唯でさえ初等部一年生から飛び級してきた天才児なんだから」

「あー、自分の荷物は自分で持ちますよ？流石に……」

「ほら、気を使わせちゃったじゃない！」

「うるせえい。まあ、一人分ぐらいなら増えても大丈夫だと思うが……」

「ですから――」

「子供はおとなしく大人に甘えなさい！」
八歳

「はい……」

感情が高ぶると肝っ玉母さんみたいな言動があるなあキャロラインさん。

本当に王族の立場にある人なのかな？自分の推測に自信がなくなってきた……。

「まあ荷物の中は置いといて、勉強会の時間を肉体強化にしたほ

うがいかもしれない。途中で倒れたりしたら困る」

「記憶力が良すぎだよねエリックくんは。だから理解力が少し追い付いてないけどそれでも八歳とは思えないほどだし」

「うらやましい話です」

「俺も記憶力が良かったら試験に苦労しないでいいのにな」

そう、私自身の事を^{飛び級}記憶力がいいとして誤魔化したのだ。

流石に口先だけでの誤魔化しは無理だった。

それなら飛び級するだけの理由を一つだけでも明確にさせれば何かにつけて納得させる事が可能になると思ったので実行。

これで思考を高校生レベルでやってしまっても周囲にいるのがその高校生。

ボロをだしても気づかれにくい……はず。

「じゃあ放課後までにエリックくんの肉体強化のためのプラン考えておいてね」

「うーい」

「時間的にはそろそろ授業かな」

「じゃあ今日も一日頑張りますよ」

肉体強化か…… おんぶに抱っこはやだし、最近やっとできたあの魔術で自主的に頑張るとしよう。

真実が八割　嘘は一割　黙秘を一割？（後書き）

アリシアさんの口調が難しい！どうやったらポワポワ天然風味を出せますかね。

いつそ他作品の口調をそのまま持つてこさせようかな……。

鈴の音ブランドのアルゴノーツの黄色のタンク天然さんとか……。

他にもキャロラインさんとクラリイさんの口調が少し似ているせいでどっちがしゃべっているかわかりにくいのも問題ですね。

どうにかしたいのは山々なんですが……まだまだ文章能力が低いのでこの有様でございます。

ではまた次話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263y/>

神様の好奇心は人をも殺す

2012年1月14日19時48分発行